

「炎上」から学び、社会に問うことをあきらめない

金子恵妙（大学院生、スクールソーシャルワーカー）

高橋夏子さん、テレビの「中の人」ならではの話をありがとうございました。

私は高橋さんが制作した映画「Given～いま、ここ、にあるしあわせ」のファンです。今回このような形で高橋さんに再会でき、お話を伺うことができたことが何より嬉しかったです。そして映画とは勝手に違うテレビの世界でも、この社会で起きていることをまっすぐに捉え続けようと奮闘されている姿を知り、大変刺激を受けました。

不寛容な社会になってしまったと思います。教育費の圧迫もあり、もはや共働きでないとやっていけない時代ですが、価値観の変化がそこに追いつかず、母親ばかりに身体的精神的負担が偏りがちです。現在、スクールソーシャルワーカーとして学校現場を見ていますが、先生方からは「(親には)もっと子どもと向き合う時間をもってほしい」とか「今どきの親は何でも学校に任せて、宿題どころか連絡帳すら見てくれていない」という嘆きがあります。一方で、昨年まで勤務していた市役所の仕事では、仕事と家事に追われてイライラし、子どもに辛くあたってしまったたり、「子どもにちゃんと向き合えていない」と苦しんだりする親を見てきました。そして、講義の中にもありましたが、そんな親たちに「チッ!」とする社会……。一体どこからこの「子育て無理ゲー社会」を改善すればいいのか、非常に難しい問題ですが、諦めるわけにもいきません。その点で「子育ての『社会化』」という考え方には納得がいきましたし、それができる社会は、子どもだけでなく、障害のある人、外国人などのマイノリティにもやさしい社会であるのだと感じました。

そして、この社会の窮屈さはテレビの世界でも同じなのだと思いました。SNS についてはその悪い面ばかりがクローズアップされがちですが、高橋さんは SNS での反響にもしっかり向き合い、「代弁されていることが少ないのかな」と捉えていらっしゃいました。そして、反響から逃げず、「炎上」から「アカン点」を導き出す。「コンプライアンス」が（過剰に？）問われる時代にあっても、社会に問う姿勢をあきらめず、ぎりぎりのラインで番組を作り続ける姿勢に感銘を受けました。

最後になりますが、私は高橋さんの「脳内にあることを表現したいのではない」という言葉にも勇気づけられました。いろいろやり散らかした人生で、これといった専門性もないことから、私は「こうあるべきだ」と自分の意見として強く主張することが少し苦手で、それをコンプレックスに感じるがありました。

それでもやっぱり「伝えたい」「考えてほしい」と思っている自分はいますし、だからこそ今この年齢で大学院生をしているのだと、今回の高橋さんの話を聞きながら再確認できました。苦しくなったときには、高橋さんや高橋さんの言葉を思い出し、自分を鼓舞していきたいと思います。これからも高橋さんが作る番組を楽しみにしています。引き続きよろしくお願いいたします。